研究ノート

大隈言道研究 Ⅸ
『草径集』 箋註（２）

進藤　康子

要約

大隈言道研究第九部。

『草径集』は、大隈言道が大坂（大阪）にて、数万首の中から、九七一首を選び出し、百部限りで出版した家集である。

作者、及び蔵版主名は、大坂天満十一丁目の「大隈屋言道」（『享保以後大坂出版書籍目録』）と記録されている。売り払い人は、河内屋宗兵衛。出願は、文久三年三月。許可は、文久四年正月二十八日。そして、同二月に三都で出版の運びとなった（『同目録』）。

底本としているのは、言道の高弟、飯塚の小林重治旧蔵本（現、架蔵本）の『草径集』三巻三冊である。その九七一首の一首ずつに、翻刻、および、和訳、箋註、初出、解説などを必要に応じて付し、資料として、底本の必要な個所を写真掲載しており、更なる言道の和歌解釈の一助としたい。

また、凡例は、前号（『九州情報大学研究論集』第２４巻「大隈言道研究Ⅷ『草径集』箋註（１）」２０２２年３月）を参照のこと。

キーワード：　大隈言道、草径集、萍堂、小林重治、万葉仮名表記

草径集　上巻　（前号の続き）

花影

５６　ましみづに　うつしてみれば　桜花
　　こはまことにも　まさる画ぞかし

◇【訳】澄みきった清らかな水に映してみると、桜花よ、これはほんとうに本物にも勝る画だなあ。

○『甲辰集』。

○花影　花の姿。影は光。

○ましみづ　真清水。

○こは　これは。

遅桜

５７　としごとに　おくるゝ花を　遅桜
　　おもひしりても　さやはさかれぬ

◇【訳】毎年、季節遅れに咲く鈍い遅桜よ。他の花に咲き遅れているとわかっていても、そのようには、早く咲けないのか。

○『戊午集』巻五。

○遅桜　遅咲きの桜の「遅」と、少々感覚が鈍い「鈍（おそ）」とを掛ける。

○さやは　「やは」は、反語の係助詞。

▽遅桜をじれったがる心。出遅れて人並みにうまく世渡りができないでいる生き方を重ね合わせた。

花間柳

58　たぐひなき　花の梢を　うちこえて
　　しだり柳の　わかみどりかな

◇【訳】他に例をみないほど美しい桜花の梢を越えて、しだれている柳の若緑の枝よ。

○『甲辰集』、題「柳」。

▽花の色と若緑の色のコントラストが際立ち、「うちこえて」で、立体感のある一枚の絵画のようである。

花下

59　のむさけに　ゑひてのちぎり　たがへずも
　　またみにくるは　桜なりけり

◇【訳】花の下で酒を飲み、酔った上での約束だが、それを背かずにまた見に来るのは、やはり桜であるよ。

○『戊午集』巻五、四句以下「また来て花にうかれぬるかな」を、「また見に来るは桜なりけり」と訂する。

○ゑひて　酔って。

▽『戊午集』では、推敲に迷った跡がある。上の句の「ゑひて」、下の句「うかれぬるかな」では、少しくどくなると思ったのだろう。しかし、題「花下」からの想起される「うかれ」も、生き生きとした自然のつぶやきであり捨て難かったと思われる。

馴花

60　なれくて　こゝろやすきに　過たれど
　　なかあしけくも　なる花ぞなき

◇【訳】桜花と、すっかり馴れ親しんで気安すぎる付き合いをしてきたが、人間の様に仲たがいをする花はないなあ。

○『戊午集』巻一、五句「ならぬ花哉」。

○馴花　花に馴れ親しむ。

○なかあしけくもなる　仲が悪くなる。

▽人間関係の難しさに比べて、花との付き合いの気安さを比べている。

遅桜

61　いそがるゝ　わがこゝろには　おしなべて
　　みな早からぬ　遅さくらのみ

◇【訳】少しでも早く桜を見たいと、つい心が急がれる私にとっては、どれも一様に遅咲の桜ばかりに思える。

○『己酉集』。

折花

62　なつかしと　折をいなびて　花の枝
　　ながゝたざまに　引けしき哉

◇【訳】なつかしいと思って折ろうとするのに、花の枝のほうでは、それを拒んで、自分のほうに引き戻そうとする様子だなあ。なかなか折れないなあ。

○『戊午集』巻五、二句「折ればいなびて」、四句「そなたざまにも」。

○ながゝたざまに　汝が方ざまに。あなたの方向へ。相手も自分の方に引っ張るのでなかなか折れないという擬人法。

○けしき　様子。

６３　さえだこそ　をるべかりしか　つゞきゝて
引よぢがたく　花のみゆらむ

◇【訳】小さな枝を折るべきだった。大きな枝がずっと続いて出てきて、なかなか手元に引き寄せて折りにくい、枝の花のようであるなあ。

○『戊午集』巻五、題「折サクラ」、五句「なる桜哉」を「なれる花哉」と訂している。

○をるべかりしか　折るべきであったのに。

▽【参考】「小里なる花橘を引きよぢて折らむとすれどうら若みこそ」（『万葉集』巻十四）。

晩鐘

６４　いつよりか　いりあひのかねは　なりつらむ
こゝろづきたる　果ての一こゑ

◇【訳】いつから晩鐘は鳴っていたのだろうか、それを気づいたのは、なんと最後の一声だった。

○『戊午集』巻六、三句「つきつらむ」を「うちつらむ」と訂したあと、「なりつらむ」とする。

○いりあひのかね　入相の鐘、日没を告げる鐘、寺で鳴らす六時の鐘のひとつ。

○こゝろづきたる　「づき」に「鐘」の縁語「撞き」をひびかせる。

▽【参考】「山寺の入相の鐘の声ごとに今日も暮れぬと聞くぞかなしき」『拾遺集』哀傷・読人不知。

花間蝶

６５　花の枝　たをればさわぐ　こてふかな
おのれをさへに　いかゞなるかと

◇【訳】花の枝を折ると、花にとまっていた蝶がさわぐよ。自分までも何か危なくなるかと。

○『甲辰集』、四句以下「おのがみにさへいかになるかと」

○こてふ　胡蝶。

○おのれをさへに　自分までも。

▽慌てふためいて逃げる蝶を擬人化している。

折花

６６　たむかひも　せぬかほにして　なか〳〵に
折袖（をるそで）はぬる　花の枝かな

◇【訳】まるで抵抗もしないような顔をして、花を折る私の袖を、むしろ、私の袖をかえって跳ね上げる花の枝だよ。

○『戊午集』巻三。

○たむかひ　手向かい。抵抗。

○なか〳〵に　かえって。あべこべに。

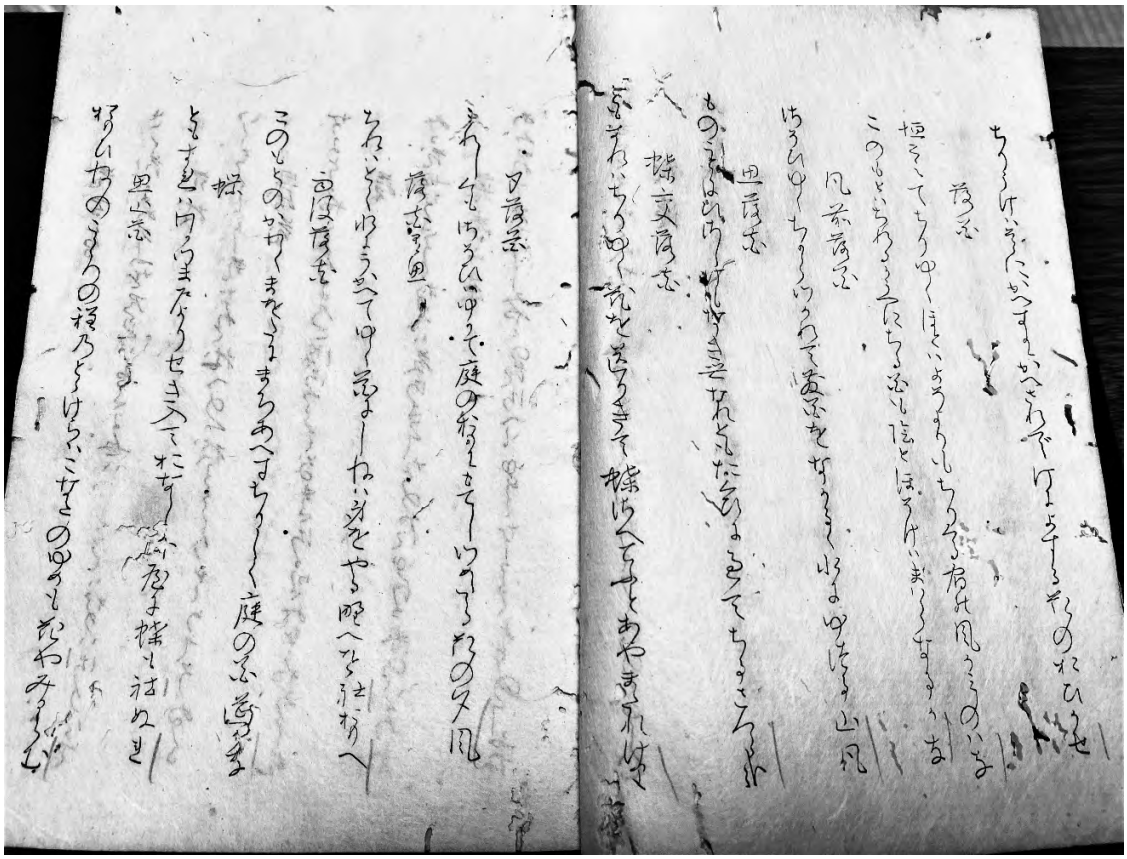
▽枝がしなり袖を跳ね上げるのを、花のいじらしい抵抗と見た。

▽【参考】「えみしを、ひたりももなひと、人はいへども、たむかひもせず」（『日本書紀』・神武紀）

雨後花

６７　あめふれば　一夜に花の　色あせて
けふのさかりは　きのう過けり

資料1　大隈言道『草径集』上巻　歌番号68番～78番



◇【訳】雨が降ると一夜(ひとよ)にして桜の花は色あせて、今日見られるはずの花の盛りは、昨日までのものだった。

○『戊午集』巻四、題「風後花」、一・二句は「かぜふけば一夜に花のおもやせて」。初稿の方が、その情景に見合った発想でこころの赴くままにうたった様子がわかる。

○一夜　一晩。

水上花

68　ちりうけば　そらにかへすにかへされで
　　汀によする　花のおひかぜ

◇【訳】散って水面に浮いていては、空にふきかえそうとしても返せないので水辺に花を吹き寄せる追い風よ。

○『戊午集』巻一。

○汀　みぎは。水際。水辺。

○かへされで　返せなくて。「かへされで」の「で」は底本通。

落花

69　垣こえて　ちりゆくほどは　よそよりも
　　ちりくる宿の　風かみのはな

◇【訳】垣を越えて桜が舞い散るこの時節は、なんと、よそからも散ってくるよ、風上にある宿の花びらも。

○『戊午集』巻五。

70　このもとは　ちれるがうへに　ちる花も
　　陰とほぞけば　まばらなるかな

◇【訳】木の下は桜の花びらが散った上にも更にまた散り積もっているが、木陰を遠ざかるにしたがって、徐々にまばらになっていくなあ。

○『庚戌集』、二・三句「散るが上にも散る花の」。

風前落花

71　さそひゆく　ちからつかれて　ちる花を
ながるゝ水に　ゆづる山風

◇【訳】散る花を、空へ舞い上げて誘い行く力が弱まって、流れる水に任せる山風よ。

○『辛亥集』、二句「ちからわかれて」を「ちからつきてや」に訂す。

○さそひゆくちから　風の力。風が花びらを誘う力。

▽「ながるゝ水にゆづる山風」に於いては「山風の吹く力が弱まったので今度は谷川に花びらを譲るよと」いう擬人法。この発想によって、眼前の景色にストーリーをもたらしている。言道の独特な着眼点と想像力の新しさがある。

思落花

72　ものごとに　ひさしげもなき　世なれども
たぐひに過て　ちるさくらかな

◇【訳】すべてのものが久しい有様でもない無常の世の中だとわかっているけれども、類例もなくあまりにも早く散る桜よ。

○『戊午集』巻五、題「落花」。

○ものごとに　あらゆるものが。

▽【参考】「百千鳥さへずる春はものごとにあらたまれどもわれぞふりゆく」（『古今集』春上）

○ひさしげもなき世　無常の世。

蝶交落花

73　ともすれば　ちりゆく花を　送りきて
蝶さへてふと　あやまたりけり

◇【訳】どうかすると、散りゆく花を惜しんできたのか、蝶が花びらを送って来ている。その蝶でさえ、花びらが蝶だったか、蝶が花びらだったかと見間違うほどである。

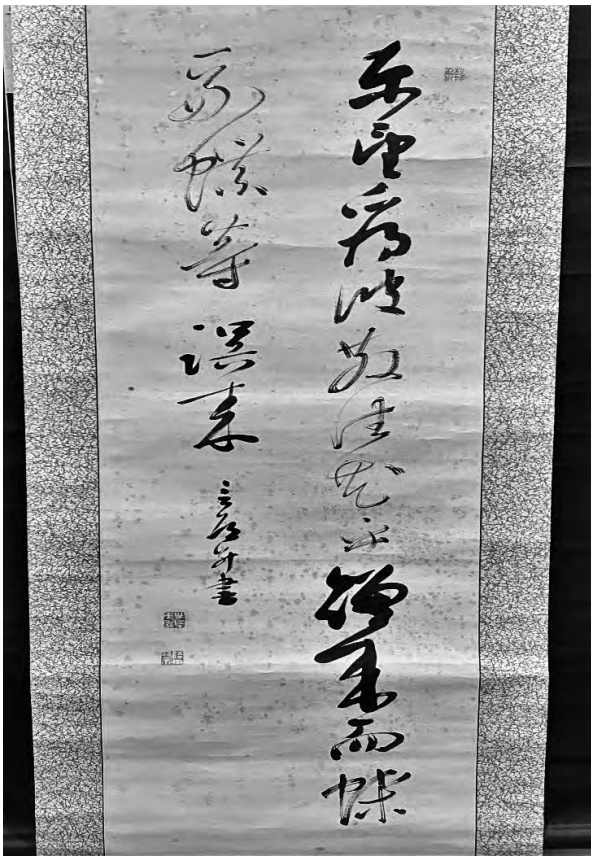
○『甲辰集』、題「蝶」。

○蝶さへてふ　同じ蝶でも、「蝶」と「てふ」と表記を書き換えることにより、視覚をも楽しませている。

○『荘子』「斉物論」のなかの「胡蝶の夢」。

▽言道はこの歌も含めて、幾度となく表記法などの趣向を変えて歌を鑑賞した。例えば、万葉仮名表記を使用し、視覚による変化を味わう要素を加え軸物に仕立て、積極的に言道が自ら手掛けていった。それは、次の作品（資料２）例によっても分る。

（五）



資料2　大隈言道自筆　万葉仮名和歌掛け軸(架蔵)

※「東望為波　散往花乎　贈来而　蝶副蝶等　誤来　言道并書」
(ともすれば　ちりゆくはなを　おくりきて　てふさへてふと
あやまたりけり)

(六)

上記資料2は、歌番号73「ともすれば　ちりゆく花を　送りきて　蝶さへてふと　あやまたりけり」の歌を、言道自身の手により万葉仮名表記で「東望為波　散往花乎　贈来而　蝶副蝶等　誤来」と掛け軸に筆で認めた。目で見ても音に聞いても和歌を楽しむという、視覚にも聴覚にも訴え、その鑑賞に堪えるという作品作りを意図している。

つまり、最初「送る」の字を用いていたのを、敢えて「贈る」という文字を選択した。用字を替えて、落花の美しさへの名残の贈り物という、意味の拡充を図っている。そして、「ちょう」「ちょう」と繰り返されるリズムが耳に心地よい。オーラルで口ずさむ歌としての要素も十分に満たしている。

また、『荘子』「斉物論」のなかの「胡蝶の夢」を彷彿とさせ、和歌に深みと奥行を加味させ、一枚の絵画を鑑賞するが如くの仕上がりを見せている。

夕落花

74　うれしくも　さそひはゆかで　庭のおもに
もてしづめたる　花の夕風

◇【訳】うれしいことに、散る花を上に誘って持っていかないで、庭の地面にじっと沈め置いてくれた夕風よ。

○『庚戌集』、題「落花」、一句「さばかりは」を、「うれしくも」に訂す。二句「さそひもゆかず」を「さそひもゆかで」に訂す。

『今橋集』上、「夕されば　もとにかへして風だにも　もてしづめたる花の白雪」。

落花有思

75　ちればとく　水にうかべて　ゆく花に
しねば身をやる　野辺を社（こそ）おもへ

◇【訳】散るとすぐにその身を水に浮かべて行く花を見ると、死ぬとその身を野辺に送ることを思いそれが重なる。

○『庚戌集』、題「水上落花」、四句以下「死ねば野にやるわが身をぞ思ふ」傍らに「死ねば身をやる野辺をこそ思へ」。見せ消ちにしていないので、どちらとも候補であったのを、傍らに書いた方を採用した。

○　野辺　埋葬の地。

▽「散る」から人の死と野辺送りを連想し、水面を野辺と見立て、思いを重ね合わせた。

雨後落花

76　このもとの　かわくまをだに　まちあへず
ちりしく庭の　花莚（はなむしろ）かな

◇【訳】木の下の乾く間すら待ちきれないで、庭一面に花が散り敷く。花莚を敷いたようだなあ。

○『甲辰集』、四句「さもちりしける」。

○　ちりしく　「花が散り敷く」意と、「莚を敷く」意を掛ける。

○　花莚　花ござ。花が一面に散り敷いたさまの比喩。

▽【参考】「山風の庭に吹きまく花むしろまたいづ方にしきしのぶらん」（『挙白集』・木下長嘯子）

蝶

77　ともすれば　わがつま戸より　せき入（いり）て
おなじ臥屋（ふせや）に　蝶も社（こそ）ぬれ

◇【訳】どうかすると、蝶が、我が家の開き戸から入って来てしまって、閉じ込めてしまったよ、私と同じ粗末な家に、蝶も寝るよ。

○『己酉集』

○　つま戸　妻戸。出入り口の観音開き（両開き）の板戸。

○　せき入て　閉じ込めて。塞ぎ入れて。

○　臥屋　みすぼらしい粗末な家。

○　ぬれ　寝れ。「こそ」の係り結びで、「ね」の已然形「ぬれ」。この粗末な家で、蝶も共に寝ることへの、素朴なうれしさが伝わる。

思山花

78　おもひねの　こゝろの程の　とゞけらば
こなたのゆめも　花やみるらむ

◇【訳】花を思いながら寝る私の心深さが、花に届いているならば、花はこちらのことも夢に見るであろうか。

○『壬生集』

○おもひね　思い寝。花を思いながら寝る。

○こゝろの程　心の深さがどれほど深いかの程度。

○とゞけらば　「ら」は完了の助動詞「り」の未然形。

○こなたのゆめ　私のことを夢として。

花間鳥

79　さく花に　あそぶを見れば　鳥だにも
　　はむことのみは　おもはざりけり

◇【訳】咲いている花に遊ぶ鳥を見ると、鳥ですら、餌を食べることだけを思っているだけではないのだなあ。

○『辛亥集』、題「とり」、一句「とびかひて」を「咲く花に」、四句「をはむのみは」を「はむことのみな」と訂する。

○はむ　食う。餌を食う。

▽【参考】『辛亥集』に「うをとりをよめる長歌」と題して、「鳥みれば鳥うらやまし　うをみれば　うをうらやまし　人は身は遊ぶとなしに　うつせみの　世をくるしみて　たとへだになし」と記述がある。言道の苦しい生活から生まれた句であることがわかる。

花枝

80　いくばくも　みし花なれど　枕べの
　　一枝にこゝろ　とゞめてぞぬる

◇【訳】数えきれないほど多く見た桜だったが、枕辺の一枝のに心をとどめて、慕いながら寝る。

○『戊午集』巻一、二句「見つる桜を」。

▽どれほど桜を見歩いたことだろう。果てしもなく桜を見たのに、それでも枕元に、桜の一枝を置いて寝る。桜を愛してやまない心情が、「心とどめて」に表出されている。

思残花

81　なにとかや　こゝろにのこる　さくらばな
　　またさるかたの　在(ある)にやあるらん

◇【訳】何といってよいか。わずかに残っているのを見るにつけ、心に残る桜花だなあ。また花の残っている所があるのだろうか。

○『戊午集』巻四、題「思余花」。

○なにとかや　何といってよいか。

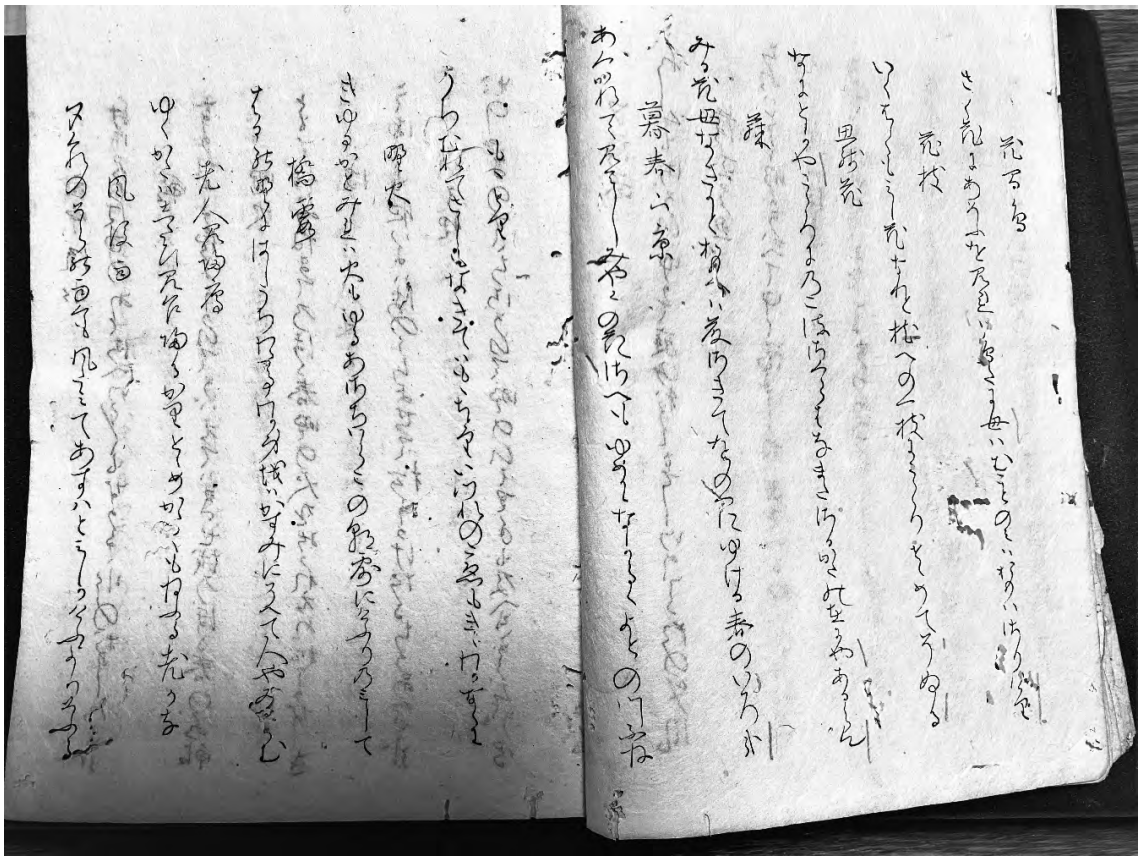
○のこる　「心に残る」と、「わずかに残る桜花」を掛ける。

○さるかた　残花のある場所。

○にやあるらん　あるだろうか。

▽『戊午集』の題「思余」を「思残」とし心残りの意を強めた。

資料３　大隈言道『草径集』上巻　歌番号７９番～８８番



藤

８２　みる花も　なきかと思へば　藤さきて
　　をのへにゆける　春のいろ哉

◇【訳】春も終わりに近づき、見る花もないと思っていたら、峰の上の方には、藤の花が咲いている。春の色はあそこへ移ったのだなあ。

○『戊午集』巻五、題「藤　晩春」。

○をのへ　尾上。春の彩が、峰の上の藤に移った。

▽この和歌の前の８１番歌の桜の残歌から、次に咲く藤へと、季節の移ろいを感じさせる配列。

暮春下京

８３　あくがれて　見てしみやこの　花さへも
　　ゆめにながるゝ　よどの川ぶね

◇【訳】あこがれて、都の花盛りを見てきたが、それもひと時の夢のようで落花が漂いゆく淀川を川舟が行くよ。

○『戊午集』巻五。

○暮春下京　「暮春、京より下る」意。

○ゆめにながるゝ　花の盛りも夢のように過ぎ、今は散り落ちた花びらが夢のように漂い流れる。

○よどの川舟　京の南の淀と、大阪（大坂）を行き来する淀川の貨客船。

もゝとり

84　うちむれて　さしもなきては　もゝちどり
　いづれのこゑも　きゝわかなくに

◇【訳】百千鳥よ。たくさん集まってそんなにも鳴いていては、どれがどれの声か、聞き分けることができないよ。

○『甲辰集』、二句「さのみなきては」。

○もゝちどり　多くの鳥。いわゆる「古今伝授」の三鳥の一つ。

○きゝわかなくに　聞き分かなくに。聞き分けられないのに。「なく」は打消しの助動詞「ず」のク語法。

野火

85　きゆるかと　見れば火もゆる　あさぢはら
　この朝露に　けぶりのみして

◇【訳】浅茅原の野火は消えるかと見ていたら、火はついて燃えるものの、この朝露のためにけぶってばかりである。

○『庚戌集』。

○あさぢはら　浅茅原。丈の低いチガヤが茂る野原。

橋霞

86　はるの野に　はしうちわたる　わが身をば
　かすみにそへて　人やみるらむ

◇【訳】春の野原にかかる橋を渡っている自分を、人はかすみの風景に加えて、みるだろうか。

○『己酉集』一句「はるの野の」。

○うちわたる　「わたる」は、「橋」「霞」の縁語。

▽この情景の中に溶け込むようにして、霞とともに、橋を渡る自分の姿を融合させて、人が見てくれているだろうかと詠む。広がりのある一幅の絵画をみるようである。

老人見帰雁

87　ゆくかたは　したひ見乍(ながら)帰るかり
　とゞめがたくも　ねぶる老かな

◇【訳】北国へと帰っていく雁の行方を慕わしく見続けながらも、引きとどめることも出来ず、また自分の居眠りも、止められずにいる老いの身かな。

○『庚戌集』一句「ゆくかたを」。

○とゞめがたく　「帰る雁」と、「ねぶる」の両方に掛かる。

○ねぶる老　自然と眠気を催す老人。

▽老人の居眠りの姿ををユーモラスに描いている。このモチーフは、「子供」への優しい目線の歌と共に、「老い」が言道のテーマの一つ。他にも「老いの身のゆがみおとろへ今さらに直ぐなる道もえこそ行かれね」。『庚戌集』には、「老来見来栄枯事　万変惟応一咲詶　放翁」と題して「老いぬれば驚くばかり変わる世もただうち聞きて笑めるばかりぞ」と詠んでいる。

楓後雨

８８　夕ぐれの　そらの雨ぐも　風たみて
あすはとみしが　けふよりぞふる

◇【訳】夕暮れの空の雨雲を見ると、明日は雨であろうと思っていたのに、風が回って、もう今日から降っている。

○『戊午集』巻二、三句「風たらで」。

○たみて　廻みて。回って。風により雨雲が巡って来ての意。

▽【参考】「いづくにか船泊てすらむ安礼の崎漕ぎ廻み行きし棚無し小舟」（『万葉集』巻二・高市黒人）。

雨中流水

８９　けさ見れば　雨のあとさへ　つくづくも
ながるゝ水の　おもしろき哉

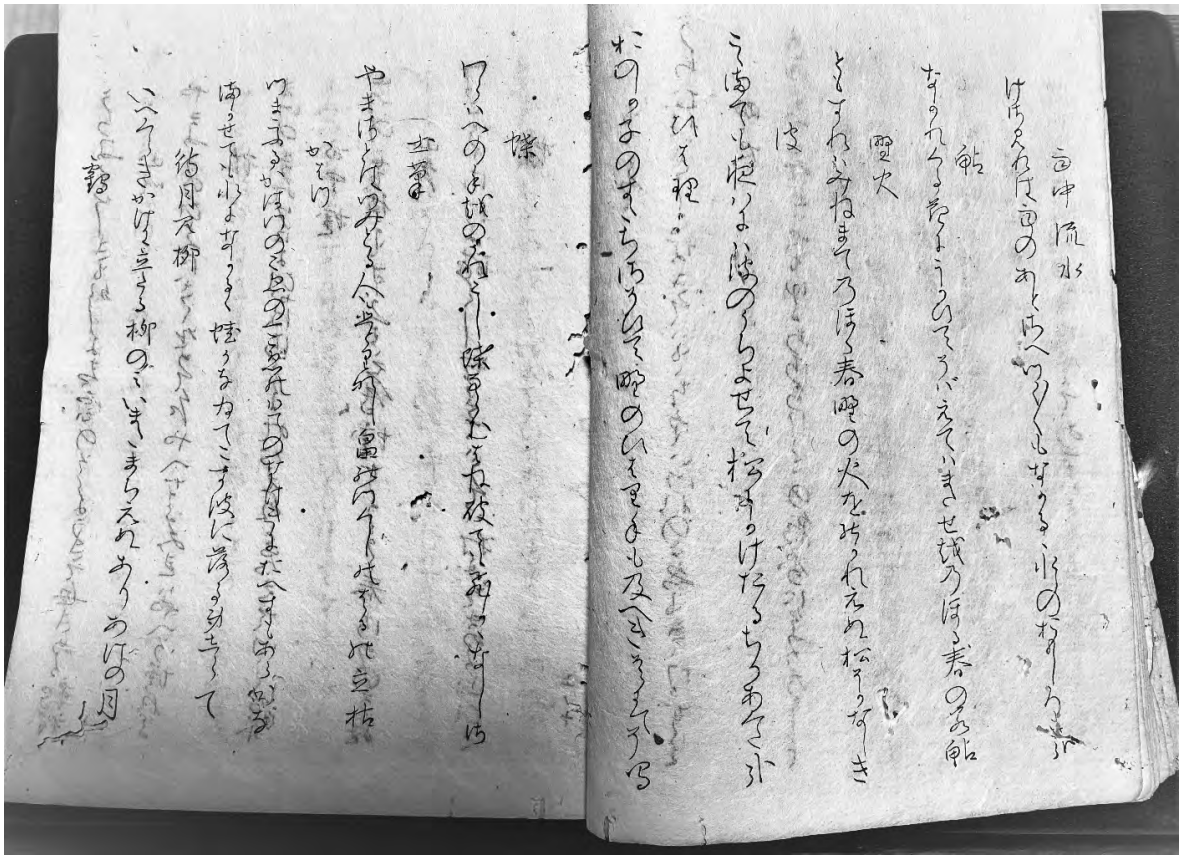
◇【訳】今朝よくよく見てみると、雨後でさえも、どんどん流れる水の様子がつくづく面白いなあと思う。

○『戊午集』巻五、一句「まばらなる」三句「つくづくと」。

○つくづくも　「つくづく」は、「考える」「眺める」などの行為を表わす語とともに用いられる。「心の底からそう思う」状態となることを言う。ここでは、注意して「見れば」と、心の底から「おもしろき哉」の上下に掛かる。

▽自然の情景を観察して、それを言葉で写し取る言道の姿勢がよく読み取れる。

資料４　大隈言道『草径集』上巻　歌番号８９番～９８番



鮎

90　ながれくる　花にうかびて　そばえては
　　またせをのぼる　春の若鮎

◇【訳】ながれ来る花を、浮かんできては、つつくように戯れ、また瀬をのぼっていく春の若鮎。

○『戊午集』・巻三、題「若鮎」。および、『今橋集』下。

○そばえては　戯れては。

▽春の陽だまりの中で、流れてきた花に戯れて浮かび上がったり、また、瀬を上ったりする若鮎の瑞々しい動きがある。

『戊午集』・巻三において、言道の傍書が、「新景、かばかりはいできがたしかし」と書き付けられている。なかなか生み出せないものであるとの自賛の言葉により、言道の自信作であることがわかる。

野火

91　ともすれば　みねまでのぼる　春野(はるのの)の
　　火をのがれえぬ　松ぞかなしき

◇【訳】ややもすると、燃え上がって峰まで上る春の野火を、逃れることができない松は悲しい。

○『庚戌集』。

○のがれえぬ松　峰に立つ松に野火が燃え広がりこちらへ迫ろうとも、動きようもなくそこを逃れることはできない。

波

92　こゝまでも　夜(よ)はには波の　うちよせて
　　松にかけたる　ちりあくた哉

◇【訳】こんなところまで夜更けには波が打ち寄せてきて、掛けたのか。海からのごみ屑が、松の木に引っかかっているよ。

○『己酉集』。

○夜は　夜半のこと。

○ちりあくた　ごみ屑。

▽夜の満潮に伴う波の動きを、翌朝知って驚く。

ひばり

93　おのが子の　すだちさそひて　野のひばり
　　手も及(およ)べき　そらにてぞ鳴(なく)

◇【訳】野の雲雀は、自分の子の巣立ちをうながして、手も届くかと思われるほどの低い空で鳴くよ。

○『戊午集』巻三。

○手も及ぶべき　手の届きそうな。

▽巣立ちを案じ、振り返りつつ子を導く親雲雀の姿を描く。

蝶

94　わらはべの　手をのがれこし　蝶ならむ
　　はね破(やぶ)れても　飛(とぶ)がゝなしさ

◇【訳】子供らの手から逃げてきた蝶であろう。羽が破れても、飛ぶその姿が、なんと物悲しいことか。

○『己酉集』。

土筆

95　やまざとは　つみとる人も　ひとりなし
　　畠のつくし　春の立枯（たちがれ）

◇【訳】山里ではめずらしくないのだろう。摘み取る人もだれとしていない。立ち枯れたままの畑の畔の土筆よ。

○『戊午集』巻一。

かはづ

96　つまこふる　かはづのこゑの一こゑの
　　はてのなげきに　たへずもあるかな

◇【訳】妻を恋慕う蛙の声の、しかも、声の限りを振り絞って鳴く一声を聞くと悲壮感で耐えられないなあ。

○『辛亥集』、四句「はてのせまり」。

○かはづ　蛙。

▽「かはづの」「声の」「一声の」と、「の」音を繰り返すことにより、次第に切なさはうねるように募り、「はてのなげき」で恋しさは、頂点に達する。

97　まかせても　水にながるゝ　蛙かな
　　ゐでこす波に　落る身しらで

◇【訳】水の流れに身を任せて流れていく蛙よ。これから先、井堰を超す波と共に、落ちる身だとは知らずに。

○『戊午集』巻二、五句「おつるとみるまで」を「おつるをしらで」と訂する。

○ゐで　井手。井堰。田へ水を引くために川水をせき止めた所。

松月見柳

98　いへくらき　かげに立たる　柳のみ
　　いまだまちえぬ　ありあけの月

◇【訳】家の陰の暗いところに立っている柳の場所には、有明の月を待ってもまだ昇ってこない。

○『戊午集』巻一、題「月夜柳有明月」。

▽光の当たることのない自分の立ち位置の悪さをも重ねている。

鶴

99　うちはぶく　けしきもなしに　青雲の
　　そらにうきても　きぬる鶴村（たづむら）

◇【訳】羽ばたきをする様子もなく、まるでふわっと青空に浮く白雲のようにやって来た鶴の群れよ。

（十三）

○『戊午集』巻一、二句「けしきもなげに」。
○うちはぶく　羽ばたく。
○青雲　青みがかった雲。晴れた空。青空。また非常に高い所。
○鶴村　鶴の群れ。万葉集にも見る歌語。
▽【参考】「白雲のたなびく国の青雲の向伏す国の雨雲の　下なる人は　我のみかも　君に恋ふらむ　我のみかも　君に恋ふれば　天地に　言を満てて　恋ふれかも」(『万葉集』十三巻)

山吹

100　やまぶきの　ひとへにさくを　めで乍(ながら)
　　やへなるみれば　やへぞ増れる

◇【訳】一重の山吹の花が咲いているのを見て賞嘆しながらも、八重咲の山吹を見ると、やはり八重咲きの方が優っている。
○『甲辰集』。
▽一重と八重を対比させながら、素朴なつぶやきをそのまま歌にしている

蜘

101　まつのまの　夕日にひかる　さゝがにの
　　たえぬと見えて　つゞく糸哉

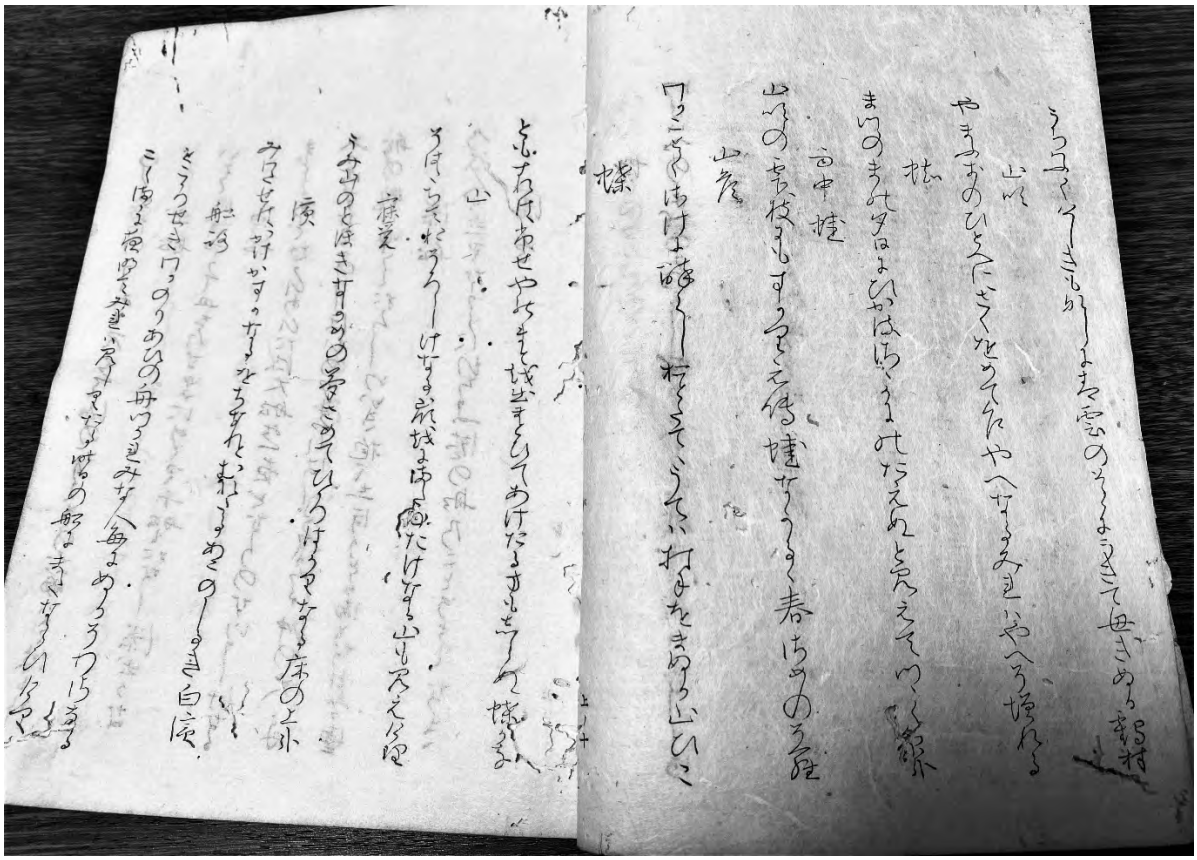
◇【訳】松の木の間に張り巡らした蜘蛛の巣は、夕陽の反射でひかり、切れているように見えるが、実は糸は、綿々とつづいているのだなあ。
○『戊午集』巻三、題「くもい」、三句以下「くものいの　たえぬと見れば続きぬるかな」。
○さゝがに　蜘蛛。
○夕陽に照らし出されて輝く、繊細で美しい蜘蛛の糸の一筋一筋を、丹念に観察し、目で追いかけ続けている様子。
▽言道の観察眼が光っている。まるで子供のような新鮮な目線で、情景をスケッチするかのように歌の言葉を紡いでいる姿勢が、言道独特の和歌を次々と生みだしていく。

雨中蛙

102　山吹の　雫(しずく)枝にも　すがりえで
　　蛙ながるゝ　春さめのそら

◇【訳】花の雫が滴る山吹の枝をつかむことができずに、雨蛙が流されていくよ、春雨の降る空だなあ。
○『甲辰集』、題「雨中かはづ」、四句「ながるゝ蛙」。
○雫枝　雫でぬれた枝。雫が滴り落ちてくる枝。
○すがりえで　すがって枝を捕まえることができなくて。
▽春雨の空の下、山吹の花の黄色と滴り落ちる雫の透明な美しさに対して、むなしく流されていく蛙との対比が際立つ。

資料５　大隈言道『草径集』上巻　歌番号９９番～１０９番



▽「蛙鳴く井手の山吹散りにけり花の盛りにあはましものを」（『古今集』春下）の和歌以来、「井手の山吹」と「鳴く蛙」がよく取り合わされたが、その伝統に対して、言道は「すがりえで」と、蛙に新たな動きを与えた。これと同様な趣向として、言道と同時代の橘曙覧（たちばなのあけみ）に「すがり居し垣の山吹飛はなれうしろも見ずにゆく蛙かな」（『志農夫廼舎歌集』）などの例があり近世後期和歌の趣向と特色を呈してきている。

山彦

１０３　わがごとく　さけに酔（よ）らし　おとたてゝ
うてば打（うつ）手を　まぬる山びこ

◇【訳】私のように酒に酔うらしい。こちらが手を打って音をたてると、同じように打つ手をまねるよ、山彦は。

○『甲辰集』二句「酒に醉にし」。

○まぬる　真似る。

○山びこ　こだま。

▽山彦を擬人化して、酒の上の戯れをしているとみなした。「うてば」「打つ」とリズムを持たせ表記も変化を持たせている。

蝶

１０４　ともすれば　ふせやのまどを　出まどひて
あけたる方も　しらぬ蝶かな

（十五）

◇【訳】ややもすると、蝶が粗末な家に入り込んできて出口もわからずに迷っている、外に出そうとして開けている窓の方角も気づかない蝶よ。

○『甲辰集』。

○出まよひて　出方がわからず迷って。

▽ふせやの「まど」と、「出まどひて」の「まど」の繰り返しで軽妙なリズムを整えている。

山

105　そばだちて　おそろしげなる　嶺越に
またゆたげなる　山も見えけり

◇【訳】ごつごつと切り立って恐ろし気な嶺を越えた向こうに、またゆるやかな山も見えるなあ。

○『戊午集』巻一。

○そばだちて　ごつごつと角張って立っている。

○ゆたげ　ゆったりとした様子。

寝覚

106　うみ山の　とほきながめの　夢さめて
ひろばかりなる　床の上かな

◇【訳】海山の遠くまで広々とした眺めの夢が覚めて、気が付くと、両手を広げたくらいの狭い布団の上だったよ。

○『戊午集』巻四、題「ゆめ」、下句「ひろばかりなる床のまへ哉」を「ひろばかりにもせまきねや哉」と訂す。左傍書「ひろばかりなる床の上哉」とあり、推敲の跡が見える。

○ひろ　尋。両手を広げた長さ。

浜

107　みわたせば　かげかすかなる　をちなれど
むれたるあごの　しるき白浜

◇【訳】見渡すと人影ははるか遠方だが、群がった漁師たちが地引網意を引く姿がはっきりと見える白い砂浜だなあ。

○『戊午集』巻二。

○をち　遠い。遠方。「こち」の反対。

○あご　網子。網引きする漁師。

○しるき　著しい。はっきりと見える。

▽【参考】「大宮の内まできこゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声」(『万葉集』巻三・長忌寸意吉麻呂)

船路

108　ところせき　わがのりあひの　舟づかれ
みな人毎に　ぬるぞわざなる

◇【訳】窮屈な乗り合い舟の中では、客はひしめき合って疲れてしまい、誰もみな寝るのが仕事だ。

○『戊午集』巻一。

○　せき　狭くて。
○　ぬるぞわざ　寝ることだけが仕事。
▽　狭い船中、どうしようもなくて寝ている乗客の姿を「ぬるぞわざなる」と、ユーモアに置き換えたところに言道独特の発想と言い回しがある。

１０９　こぐまゝに　夜明けてみれば　見しりたる
昨日の船に　またならびけり

◇【訳】漕ぐに任せて乗っていて、夜が明けてみると、我々の船は昨日見た船にまた並んでいるよ。
○『戊午集』巻一、一句「あさぼらけ」。
▽　広い海の中、偶然にきのう並んでいた船と、今日もまた並んで走っている、退屈な船旅でのちょっとした驚きの出来事をさらりとスケッチするように歌に写した。

１１０　ゆくふねの　こしあと見えて　海のおもに
その一筋は　さゞ波もなし

◇【訳】漕いでゆく船の今まで来た航跡が、海面に一筋くっきりと見え、さざ波もない。
○『戊午集』巻一、一句「わが船の」。
○　こしあと　来た跡。航路。
○　海のおも　海面。
▽　歌番号１０８、１０９，１１０は、初出の『戊午集』巻一においても同様の三首連続の配列で、船の上からの意図された連作詠歌の構成となっている。

（十七）

（続く）